継ぐ

小川梨那
佐藤　想
島田寧和
白濱未尋
中川千裕
中村心咲
原　花穏
古田侑希
三谷空楽

戦後78年 ふるさとの戦争とは

志村さんと太田さんに聞く 戦時中の菊池恵楓園は？

十二月に沖縄に修学旅行に行く私たちは、沖縄戦について調べ学習をしている。私たちの住む地域での戦時中はどうだったのか、菊池恵楓園自治会の志村さんと太田さんに話を聞いた。恵楓園でも空襲があったのか、食料や医療物資はどうしていたのか、戦時中の生活はどうだったのか、取材することができた。

昭和二十年五月十三日、恵楓園も空襲を受けた。ロケット弾六発が打ち込まれ、建物も倒壊した。八名が生き埋めとなり、二名が亡くなったそうだ。

この辺りには、黒石原飛行場や菊池飛行場があり、空襲もたびたびあったようだ。青年団で避難壕をつくった。軽症者が重症者をリヤカーにのせて避難した。

戦時中は、いろんな所を畑にして、野菜や芋を作って食料にしていた。炭や塩も自分たちで作っていたそうだ。しかし、患者全員には食料が渡らず、病気や栄養失調で亡くなる人も少なくなかった。昭和二十年から二十年までに約五〇〇名が亡くなっている。遺体を並べて焼いたという話もされた。

とにかく燃料が不足していたため、園内の木を一二〇〇本も切って、炭を作ったり、根っこを干してしたそうだ。食べ物がない中、一日おかゆ二食に減らして、その分国のために献金していたとも話された。医療物資もなかったので、包帯などは洗って何回も使っていた。電気もつかず、ロウを溶かして明かりにしていた。自分たちで作った炭を熊本市内に売りに行ったりして、生活していた。三年三ケ月の間、自分たちで自給自足の生活をしていた。差別はずっと続いており、その苦しい状況は戦後も続いていたと太田さんは語られた。

「天皇陛下のために忠義を尽くすという考えが当時の常識だった。」という言葉が当時の世の中を表しているようだった。戦争の中で力強く生きてこられた入所者の方々の力強さを感じることができた。

戦時中の薬物投与を検証

戦時中、菊池恵楓園で「虹波」という薬剤の投与が入所者に対して行われたという新聞記事を目にした。私たちはそのことについて菊池恵楓園自治会の志村康さんと太田明さんに話を聞いた。

一九四二年十二月～一九四三年十月に恵楓園入所者三百七十一人に入所者薬剤投与を検証したそうだ。恵楓園では、静脈注射や筋肉注射、座薬やカプセルなどで投与されたそうだ。紫色の錠剤を一日に三錠飲まされた人もいる。飲み始めると胃けいれんを起こし、薬をやめたいと訴えた人もいたそうだ。新しい健康増進剤として飲むように言われたそうだ。

虹波の研究の目的は「戦闘に必要なる人体諸機能の増進」「極寒地作戦における耐寒機能向上」などとされているために、関連資料の現代語訳を外部に委託したが、資料が膨大にあるためマスコミもぜひ検証してほしいと話されていた。

この事実を聞いて、とても信じられない思いだった。隔離政策自体が大きな差別で、人生を奪われているのに戦時中だからといってこのようなことが行われていたことに怒りを感じた。太田さんは淡々と語られていた。

「戦争とはどういうものかみなさんも考えてください」という太田さんの言葉が心に残った。私たちは正しい知識を身につけ、もっともっとハンセン病について学んでいきたいと思った。

世界を変える三千人 狩俣日姫さんと学ぶ沖縄戦

私たちは、七月に沖縄県普天間市に在住の平和教育ファシリテーター狩俣日姫さんに話を聞いた。講話では、米軍が無血上陸できた理由や日本で唯一の地上戦はどのような戦いだったのかを学ぶことができた。私たちが特に印象に残っているのは、自分が沖縄戦を体験していたらどの選択をするかというワークショップをしたことだ。私たちは、米軍が中部に上陸したという設定に対して、北部に疎開するや南部に避難するなどの選択をしたりしたけれど一番驚いたのはどの選択をしても生き残れないということだ。

これを通して、戦争で生き残ることは奇跡だから、今ある命を大切にし、沖縄戦で起きたことを後世に語り継いでいくことが重要だと狩俣さんは語られた。狩俣さんのように私たちも戦争の真実を語り継いでいきたいと思った。

狩俣日姫さんとオンライン学習をする楓の森中学校2年生

生徒の感想

この沖縄戦は、あえて地上戦にして本州に来るのを遅くする、出血持久戦ということは初めて知りました。こんなに犠牲を出させる意味はよく分からなかったです。

根本的な話をすれば戦争がこの世に無ければよかったのですが沖縄戦では罪なき住民が九四〇〇〇人、四人に一人はしくなってしまっている。沖縄が日本の捨てゴマのように扱われていて理解できませんでした。

戦争が終わり自分だけ残って家族や友達、身近な人が亡くなってしまって申し訳ない気持ちがあったと思いました。私はこれから沖縄戦を学び上で見聞のことのように考えて学んでいきたいです。

多摩全生園に保管されている爆弾破片の写真（くまもと戦跡ネットワーク　高谷和生氏より）

空襲の激しさが伝わってくる。

当時の爆弾破片が残っているのに驚いた。黒こげが惨状を表している

昭和20年5月13日　全壊した男家飯店（菊池恵楓園記念誌より）

約束～平和のレクイエム

沖縄戦で従軍看護婦として活躍し犠牲になった女子学徒隊。そのうち沖縄県立第二高等女学校の四年生たちによって編成された学徒隊が白梅学徒隊である。白梅学徒隊は昭和二十年三月二十四日、八重瀬岳中腹にある第二十四師団第一野戦病院に配属された。六月四日、米軍の猛攻により第二十四師団第一野戦病院は南部へ後退することに決まり、「白梅学徒隊」は解散となった。四十六名の生徒たちは散ばらばらに分かれて南部へと逃げていった。この逃避行中に多くの人が犠牲となった。

その中に中山きくさんがいた。きくさんは本や講話を通して戦時中の自分の体験を語った。本には、きくさんが学徒が体験した内容や描写などが丁寧に描かれている。三月十四日に第一野戦病院に配置された。きくさんたちに与えられた仕事はとても苦しいもので休む暇もなく患者の手当てで精一杯だった。六月十四日の朝、きくさんらは病院壕を閉鎖することを告げられた。その後は何とか逃げきるも最後はアメリカ軍に捕まり戦争は終わった。そんな体験が描かれているのが「きくさんの沖縄戦」という絵本である。きくさんの平和への思いはとても強かった。きくさんが講話を始めた時には戦争から長い年月が経っていた。講話は若者の心に響き今ではきくさんの思いや戦争の体験を語り継ぐ人がいる。私たちも戦争と平和を語り継がなければいけない。

中山きくさんの沖縄戦

空のおもかげ 特攻隊と三人の少女

昭和二十年四月からの沖縄戦では、九州各地の陸海軍飛行場から多くの特攻隊が出撃した。熊本の陸軍基地は、中継基地となり、地域の住民は出撃する特攻隊員を支え「慰問」した。

菊池市隈府で撮られた一枚の写真には、陸軍七十六振武隊と慰問した三人の少女が写っている。その中の二人丸山さんと中野さんがその写真を手がかりに、部隊長の遺族を探すというドキュメンタリー番組がテレビで放送された。

八月五日、五名で行われた「証言会」で中野さんが当時のことや熊本大空襲についての話をされた。番組を通して遺族にお会いし、当時の記憶が少し思い出されていたことや自分の体験談などを話された。「熊本大空襲の恐ろしい経験は今でも脳裏に焼き付いている。ウクライナの人もきっと同じ思い。一人一人が一番大切」という中野さんの言葉が心に残った。特攻隊を見送った丸山さん、証言をされた中野さんの思いを語り継ぎたい。

鎮魂の願いを花火に込めて！

私たちは、菊池恵楓園自治会の太田さんに納涼盆踊り大会について話を聞いた。

昭和の初め、家族がしないのならということで、お盆供養の盆踊り大会が始まった。歌い手、踊り手が集い「恵楓音頭」として毎年旧盆の時期に行われている。いろんな地域の踊りが三種類あり、仮装行列なども行われて毎年大盛況である。国のお金は一切使わず、入所者の寄付金で運営されている。

新型コロナウイルスの影響で、三年間中止された「納涼盆踊り大会」も今年復活。最後は、鎮魂の願いを込めて約七百発の花火も打ち上げられた。

編集後記

私たちは、この新聞を通して地域の戦争や沖縄戦のことについて学ぶことができた。自分たちが書いた新聞を多くの人に読んでもらい、地域の戦争の歴史などを深く知ってもらおうと工夫した。記事を作るために夏休みから取材を始めここまで作りあげることができた。狩俣日姫さんとのオンライン平和学習や恵楓園の方々との交流で学びを深めることができた。特に、恵楓園の志村さんと太田さんの話を聞けたことは、とても貴重な経験となった。差別に立ち向かう姿、戦時下でも力を合わせてたくましく生きる姿を学ぶこともできた。壁新聞の活動を通してこれからも楓の森中学校から発信していきたい。